

「思考力・判断力・表現力を育てる指導法の研究」

～ 言語活動の充実を通して ～

I 研究の内容

1 研究仮説

「意図的、計画的に言語活動を取り入れる授業改善を進め、実践交流を図ることで、児童の確かな知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力の向上が効果的に図られていくであろう。」

2 研究の具体的内容

(1) 「言語活動の充実」についての理論研究

講師 総合教育センター 篠原 忠実主幹研修主事

(2) 「言語活動の充実」についてのワークショップ

(3) 検証授業の実施

ア 第3学年 算数科授業実践「はしたの大きさの表し方を考えよう」

授業者 中村 弘和教諭

指導・助言 峡東教育事務所 柴田 幸也指導主事

イ 第4学年 算数科授業実践「変わり方調べ どのように変わるかな」

授業者 志村 多恵教諭

指導・助言 峡東教育事務所 柴田 幸也指導主事

(4) 一人一実践の授業公開

(5) 学習集団づくり

ア Q-U調査の効果的な活用（K13法による分析を基にした取組と検証）

イ 学習会 講師：甲州市スクールカウンセラー 長尾 雅裕先生

(6) 言語環境の整備について

ア 全校の言語環境の整備（学習言語の検討・国語辞典の活用）

イ 図書館の活用

(7) 保護者との連携について

ア 学年に応じた家庭学習（いじりの子ノート）の指導のあり方

イ 家庭学習の習慣化と学習内容を高めるための連携のあり方

3 研究の方法

(1) 全体研究会（理論研究，検証授業，Q-U調査の分析等）

(2) ブロック研究会（発達段階に応じた言語活動の実践研究等）

- (3) 個人研究（一人一実践）
- (4) 実態調査（各種学力調査・Q-U調査）

II 成果と課題

1 成果

- (1) 表現する力が弱いという本校児童の課題解決に向け、「学習過程の工夫」「指導の工夫」「評価の工夫」という3つの視点から言語活動を通して授業改善に取り組み、児童の学習観察からその効果が確認できた。
- (2) 理論研究、検証授業を通して、授業の中に言語活動を有効に取り入れる指導法の工夫について理解を深め、それを一人一実践により各自が検証を試み、児童に還元することができた。
- (3) K13法により作成した「アタックシート」を基に指導方法について検討し、各学年で実践したことにより、全職員による児童の共通理解やQ-U調査の効果的な活用につなげることができた。
- (4) 「いじりの子ノート」（家庭学習ノート）の基本的な形式・内容について検討し、帰りの会で5分間、家庭学習に取り組みせ、家庭学習のスイッチを入れる取り組みを行ったことは、多くの児童に学習方法やめあてを意識させ、主体的に学習に取り組ませる上で効果がみられた。

2 課題

- (1) 問題解決型の授業について、学習過程の時間配分をどのようにしていくのか、より効果的な学習過程を目指し研究を深めていく必要がある。
- (2) 校内研究と甲州市「学力プロジェクト」をより有機的に組み合わせ、公開授業研究会、Q-U講演会等を校内研究の一環と位置付け研究を進めることにより、更なる研究の成果が期待できる。
- (3) 言語活動を取り入れたペア学習・グループ学習を行うときの、児童の個人差へ対応した指導方法について研究を深めたい。
- (4) 児童の発達段階、学力差に応じた家庭学習の取り組みせ方について、児童の実態に応じた、有効な指導方法を明らかにし、保護者と連携し取り組みを進めていく必要がある。

III 成果物

- 1 検証授業授業案・実践のまとめ
- 2 「言語活動の充実」についてのワークショップ集約
- 3 一人一実践授業案・実践のまとめ
- 4 Q-Uアタックシート（全学年）
- 5 家庭学習資料

（研究主任 中村直人）